

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## I.2. 調査の概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水谷, 修 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002331">https://doi.org/10.15084/00002331</a>

## I.2. 調査の概要

熊谷 智子, 杉戸 清樹

- I.2.1. 調査の目的
- I.2.2. 被調査者
  - I.2.2.1. 調査対象者
  - I.2.2.2. 被調査者の属性
- I.2.3. 調査手順
  - I.2.3.1. 調査組織
  - I.2.3.2. 被調査者の探し方
  - I.2.3.3. 調査時期・地点
- I.2.4. 調査に用いた刺激材料
- I.2.5. 調査方法
- I.2.6. 設問について
  - I.2.6.1. 設問のポイント
  - I.2.6.2. 質問のタイプ
    - I.2.6.2.1. ビデオ視聴前の一般的な言語行動意識についての質問
    - I.2.6.2.2. 消音再生による提示をもとにした質問
    - I.2.6.2.3. 音声付きの映像提示をもとにした質問
    - I.2.6.2.4. 映像からさらに一般化したレベルでの質問
  - I.2.6.3. 回答のタイプ

### I. 2. 1. 調査の目的

本調査の主要な目的は、母国以外の言語文化社会で現在生活している人々から、母国と現住国における自身の言語行動、現住国の人々の言語行動についての意識、予測、あるいは観察を収集することによって、以下の点に関する所見を得ることにある。

- 同じ個人が母国と現住国で言語行動、およびその基底にあるものの考え方をどのように変えているか（あるいは、変えていないか）。
- 現住国における言語行動の仕方が、現住国の人々の言語行動様式に関する意識とどのように関係しているか。
- 日本人被調査者の回答にみられる言語行動の傾向と、在日外国人がみる日本人の言語行動様式とは、どの程度重なるか。すなわち、日本人の意識する「日本人の言語行動様式」と在日外国人の目に映る「日本人の言語行動様式」はどの程度一致し、またどの程度ずれがあるのか。また、他の各国についても、各々の国を母国とする在日外国人の回答する「母国における言語行動」と、その国在住の日本人のみる「この国の人々の言語行動」はどのように一致し、あるいはずれているのか。
- 言語行動を行う際に配慮する要素、言語行動を評価・判断する際に着目する要素は、言語文化によってどのような部分が共通し、またどのような部分に差異が見出されるのか。

これらは、異文化接触における誤解や摩擦の発生を予測したり、その原因や対処方法を考える上での、貴重な手がかりと考えられる。本研究では、これら諸点に関する知見を得るために、特定の言語行動場面を視聴覚刺激（ビデオ映像）によって提示し、それに対する被調査者のさまざまな言語行動意識を収集した。

### I. 2. 2. 被調査者

#### I. 2. 2. 1. 調査対象者

異なる言語文化において現在生活している人として、在外日本人、在日外国人、および在外日本人との比較のために国内在住の日本人を被調査者とした。日本（語）との比較対照相手とする言語、国（以下、「対照国」とよぶ）、およびそれに基づく在外日本人・在日外国人グループは、以下のとおりである。

言語	対照国	在外日本人	在日外国人
ポルトガル語	ブラジル	在伯日本人	在日ブラジル人
フランス語	フランス	在仏日本人	在日フランス人
英語	アメリカ	在米日本人	在日アメリカ人
朝鮮語	韓国	在韓日本人	在日韓国人(注1)
ベトナム語	ベトナム	在越日本人	在日ベトナム人

これら在外日本人・在日外国人グループに加え、国内日本人として、逆にあまり異文化体験の多くない都内在住者を対象に調査した。

被調査者の条件は、以下のとおりである。

○全グループ共通

- ・年齢が18歳以上であること

○在外日本人，在日外国人

- ・当該国に3ヶ月以上在住していること
- ・日常的に現住国の人々と社会的接触があること（たとえば、学生で大学の寮と教室との往来が生活の大部分を占めるような場合はできるだけ除く）

○国内日本人

- ・3ヶ月以上の海外居住経験がないこと
- ・日常的に外国人と接する職業に従事していないこと

在外日本人，在日外国人については、各場面につき各グループ30名以上に調査を行った。国内日本人については、75名の調査者を得た。調査全体を通じた被調査者総数は、延べで990人（男性440人，女性550人）である（図表Ⅲ-7-1）（注2）。

#### I.2.2.2. 被調査者の属性

被調査者のグループごとの人数，属性による内訳などについては、図表Ⅲ-7-1～Ⅲ-7-4，Ⅲ-9-1～Ⅲ-10-5を参照されたい。以下に，属性の内訳について概観を述べる。

○性別（図表Ⅲ-7-1およびⅢ-7-2）

全体に女性が多い。日本人全体では女性が約6割，在仏および在米日本人グループでは約7割を占める。外国人は，全体的な男女比は半々に近く，ブラジル人，フランス人，韓国人では男性の方が多くなっている。

○年代（図表Ⅲ-7-1およびⅢ-7-3）

高い年齢層が多いのは在伯日本人で，50代以上が約半数を占める。一方，若年層が多い在越日本人，在日アメリカ人，在日ベトナム人では，20代が6～7割にのぼる。全体的に，日本人よりも外国人被調査者の方が若い年代の割合が大きい。

○現住国での滞在年数（図表Ⅲ-7-1およびⅢ-7-4）

10年以上の長期在住者が30%を超えるのは，在伯日本人，在米日本人，在日フランス人のグループである。一方，在韓日本人，在越日本人，在日ベトナム人では30%以上が在住1年未満となっている。

○現住国の人との接触度（図表Ⅲ-9-1およびⅢ-9-2）

仕事の場面とそれ以外の場面に分けて質問したが，いずれにおいても接触が多いのは在日フランス人，在日アメリカ人である。フランス人は長期在住者も全体に多いが，アメリカ人は長期在住者が少ない割に接触度が非常に高いのが特徴的である。逆に，いずれの場面でも接触が多くない人が40%近くかそれ以上を占めるのは，在伯日本人，在韓日本人，在日ブラジル人，在日韓国人，在日ベトナム人である。在伯日本人は，在住期間が長い人が多い割に接触度は低いということになる。

○現住国における使用言語（図表Ⅲ-10-1～Ⅲ-10-5）

在外日本人・在日外国人のほとんどのグループを通じて、家庭での使用言語は母語が主で、現住国の言語を最も多く使用するのは「（仕事、家庭以外の）その他の日常場面」であった。また、ほとんどのグループで仕事での使用言語として母語がある程度あがっているが、在日ベトナム人は、ベトナム語を仕事で使用するという回答はなかった。

I. 2. 3. 調査手順

I. 2. 3. 1. 調査組織

前章でも述べたように、本調査は平成6～10年度文部省科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」（研究代表者：水谷 修）における研究班2「言語現象を中心とした我が国をとりまく文化摩擦の研究」（代表：平野健一郎）の国立国語研究所チーム（リーダー：西原鈴子）によって企画・遂行されたものである。国語研チームは、以下のメンバーからなる。

池田理恵子（国立国語研究所）  
石井恵理子（国立国語研究所）  
生越直樹（東京大学，元国立国語研究所）  
尾崎喜光（国立国語研究所）  
熊谷智子（国立国語研究所）  
佐々木倫子（国立国語研究所）  
杉戸清樹（国立国語研究所）  
西原鈴子（東京女子大学，元国立国語研究所）  
早田美智子（国立国語研究所）（五十音順）

なお、調査の実施にあたり、被調査者の紹介、調査会場の便宜、その他でご協力いただいた機関・個人は以下のとおりである。記して謝意を表する。

協力者一覧（敬称略，五十音・アルファベット順。所属は原則として当時。）

<在日日本人・在日ブラジル人調査>

上野市国際交流協会  
太田市国際交流協会  
カトリック大和教会  
国際協力事業団サンパウロ事務所  
国際交流基金サンパウロ日本語センター  
さがみ野プロテスタント教会  
上智大学  
(財) 鈴鹿国際交流協会  
日本語普及センター

ブラジル日本商工会議所  
三重大学（留学生センター）  
足立えりか（東京外国語大学留学生）  
安藤貞博（(財)鈴鹿国際交流協会）  
一甲真由美エジナ（国際交流基金サンパウロ日本語センター）  
岩垣文明（国際協力事業団サンパウロ事務所（当時）・新宿日本語学校（現））  
江副隆秀（新宿日本語学校）  
太田 亨（国際交流基金サンパウロ日本語センター（当時）・金沢大学（現））  
岡本能里子（東京国際大学）  
河野 彰（Sociedade Japonesa para Promocao da Ciencia（当時）・大阪外国語  
大学（現））  
左近寿一（ブラジル日本商工会議所）  
鈴木潤吉（国際協力事業団サンパウロ事務所（当時）・北海道教育大学（現））  
堤クラウジーナ（太田市国際交流協会）  
戸井田エレナ  
日向ノエミア（上智大学）  
藤本久司（上野市国際交流協会）  
三田千代子（上智大学）  
宮田達夫（宮田材木店；カトリック大和教会関係者）  
森 由紀（三重大学留学生センター）  
吉野朋子（上智大学大学院）  
ヴェンデリーノ・ローシャイタ（上智大学）

<在仏日本人・在日フランス人調査>

天理日仏文化協会  
猪崎保子（フランス国立言語文化研究所）  
和泉裕文  
岩切耕一（天理日仏文化協会）  
大野洋一  
奥山由紀夫（欧明社）  
新聞英世  
代田智恵子  
Sylvie Gillet 鈴木  
芹澤ゆう  
中嶋雅人  
西沼行博（フランス国立科学研究センター 音声言語研究所）  
額田登美子  
法貴則子  
村上友子（味の素欧州本部）  
Helen 森

山本恭右（味の素欧州本部）

義本博司

義本真帆

Yves Champilou

France Dhorne

Jacques Lalloz

Christine Lamarre

<在米日本人・在日アメリカ人調査>

国際交流基金ニューヨーク日米センター

国際交流基金ロスアンジェルス事務所

全国市町村国際文化研修所

米国住友商事株式会社

米国ICU同窓会

CLAIR業務部指導課

JETRO研修協力課

<在韓日本人・在日韓国人調査>

大韓イエス教東京福音教会

阿形英樹（在釜山日本国総領事館）

上野栄三（在韓国日本大使館広報文化院）

鈴木光男（在釜山日本国総領事館）

武山俊彦（ソウル日本人学校）

松本 哲（大和証券ソウル支店）

山下みゆき（在韓国日本大使館広報文化院）

<在越日本人・在日ベトナム人調査>

京都日本語教育センター

静岡日本語教育センター

新宿日本語学校

ホーチミン市総合大学付属「南学」日本語クラス

青木久治（全国市町村国際文化研修所）

朝妻小津枝（フオンドン大学）

石田 徹（在ベトナム日本大使館）

江副隆秀（新宿日本語学校）

大塚 徹（さくら日本語学校）

春日由里（新宿日本語学校）

河上淳一（在ベトナム日本大使館）

木下俊明（横須賀市教育委員会）

グエン・ヴァン・タオ（さくら日本語学校）

五味政信（一橋大学留学生センター）  
 鷹野 哲（東遊ドンゾー日本語学校）  
 嶽肩志江（日本語教育研究所）  
 武田聡子（日本語教育研究所）  
 竹見久仁子（京都日本語教育センター）  
 田原洋樹（在ベトナム日本大使館）  
 中山恵利子（阪南大学）  
 仁科喜久子（東京工業大学留学生センター）  
 西原純子（京都日本語教育センター・龍谷大学）  
 春原憲一郎（海外技術者研修協会）  
 蛭川弘尹（日越文化協会・南学日本語クラス）  
 藤本久司（上野市国際交流協会）  
 丸島雄治（株式会社はせがわベトナム事務所）  
 丸山敬介（同志社女子大学）  
 村上雄太郎（レー・バン・クー 茨城大学工学部）  
 安井敏之（三井物産株式会社ハノイ支店）  
 山本秀孝（全国市町村国際文化研修所）  
 吉田稔明（清水建設株式会社ハノイ事務所）  
 Duong Thi Nhan（ベトナム ハータイ省教育訓練事務所）  
 Hoang Anh Thi（早稲田大学留学生）  
 Nguyen Thang Chien（東京工業大学留学生）  
 Nguyen Thi Bich Ha（ベトナム貿易大学日本語科）  
 Pham Duc Viet  
 Tran Thu Thuy（一橋大学留学生）  
 Vu Cuong（留学生）  
 肥後玉衣／高橋貴美江／柳町千亜紀 [ベトナム語入力・校正]

#### I.2.3.2. 被調査者の探し方

被調査者は、調査チームのメンバーの知人、あるいは知人の紹介などによって主に得た。その理由は、調査に要する時間が全体で1回約2時間に及ぶこと、外国人でも原則として日本語での面接調査に対応できるだけの日本語能力が必要とされることなどから、無作為抽出などの方法があまり現実的でないと判断したからである。

#### I.2.3.3. 調査時期・地点

調査を行った時期と地点は、以下のとおりである。

##### <在伯日本人調査>

第一次：1996年 2月	ブラジル サンパウロ, モジダス・クルーゼス
第二次：1996年10月	ブラジル サンパウロ
第三次：1997年 9月	ブラジル サンパウロ

<在仏日本人調査>

第一次：1996年1～2月

フランス エクサンプロバンス，パリ

第二次：1996年10月

フランス パリ，クレルモンフェラン

<在米日本人調査>

第一次：1996年1～2月

アメリカ サンタモニカ，シカゴ，デトロイト，  
ニューヨーク

第二次：1996年 7月

アメリカ ロスアンジェルズ

第三次：1996年10月

アメリカ ロスアンジェルズ，ニューヨーク

第四次：1997年 3月

アメリカ ニューヨーク

<在韓日本人調査調査>

第一次：1996年 1月

韓国 ソウル

第二次：1996年10月

韓国 ソウル

第三次：1997年 1月

韓国 ソウル，プサン

<在越日本人調査>

第一次：1995年2～3月

ベトナム ホーチミン，ハノイ

第二次：1996年2～3月

ベトナム ホーチミン，ハノイ

第三次：1997年11～12月

ベトナム ホーチミン，ハノイ

<国内日本人調査>

1998年7～8月

東京都

<在日ブラジル人調査>

1997年8月～1998年7月

東京都，群馬県（太田市），神奈川県（大和市，綾瀬市，  
横浜市，相模野），三重県（津市，上野市，鈴鹿市）

<在日フランス人調査>

1996年6月～1998年6月

群馬県太田市，静岡市，東京都，川崎市，京都市，  
茨城県北相馬郡守谷町，我孫子市，大阪市

<在日アメリカ人調査>

1997年2月～1998年6月

大津市，川越市，東京都，大阪市，静岡県（袋井市，  
掛川），岩手県雫石町，横浜市

<在日韓国人調査>

1996年6月～1998年5月

東京都

<在日ベトナム人調査>

1998年2月～8月

東京都，静岡市，神奈川県鶴間，千葉県ユーカリが丘，  
京都市

#### I. 2. 4. 調査に用いた刺激材料

本調査で6つの言語行動場面を提示する際の刺激材料として用いた映像は、以下のテレビ番組（ドラマ）から得た。映像の使用にあたっては、日本放送協会権利情報センター（場面1, 6）、ユニオン映画株式会社（場面2, 3）、東京放送（TBS）（場面4, 5）、日本脚本家連盟より許諾を得た。

- 場面1 「青春家族」 <16秒>  
(日本語教育用ビデオ教材 発行：NHKソフトウェア 発売：凡人社)  
2巻-1, 10
- 場面2 「火曜サスペンス劇場 新・女検事 霞 夕子」 <11秒>  
(日本テレビ 1995年2月7日放送分)
- 場面3 「火曜サスペンス劇場 新・女検事 霞 夕子」 <35秒>  
(日本テレビ 1995年2月7日放送分)
- 場面4, 5 「徹底的に愛は」 <合計38秒>  
(TBS 1996年5月17日再放送分 第5話「えっ」)
- 場面6 「連続テレビ小説 青春家族」 <16秒>  
(NHK 1989年2月27日放送分)

#### I. 2. 5. 調査方法

調査の方法に関して、以下に述べる。

##### ○調査方式

面接形式（短いビデオの場面を提示しては質問し、回答を得ることをくり返す形）

##### ○所要時間

ビデオ視聴やフェイスシート記入なども含めて1回につき約2時間

##### ○場所

被調査者の自宅や、教会、地元の国際交流協会の会議室、国立国語研究所など。  
ビデオ視聴の必要があるため、原則としてビデオ設備のあることが条件であった。どうしてもビデオ設備が得られない場合は、調査者が携帯用のビデオカメラとプロジェクターを持参して、映写した。

##### ○質問方法

調査者が手元の調査票の質問を読みあげ、被調査者から口頭で回答を得た。被調査者は、手元に選択肢リスト(注3)をもち、調査者からのリスト番号の指示に従って、該当の質問時に参照した。外国人被調査者用には、母語による翻訳を日本語に併記した選択肢リストを用いた。調査では、質問・回答ともに日本語が原則ではあったが、外国人被調査者の日本語能力に応じて、質問・回答を部分的に被調査者の母語で行うこともあった。

### ○調査の人数

日本人調査では、被調査者1～3人に対して調査者1人という組合せが多かった(注4)。外国人の場合、外国語である日本語での調査で進行速度が遅くなるため、調査者は2人1組で臨み、1人は質問に専念し、もう1人がビデオ操作や回答のメモをした。ブラジル人、ベトナム人調査では、調査者が通訳を伴って臨むこともあった。

### ○調査場面数

1回の調査場面数は、被調査者が在外日本人1～2人の場合で2～3場面というのが平均的であった。在日外国人は、日本語に堪能な被調査者1～2人であれば、2～3場面を行うことができた。しかし、通訳を介したり人数が多いなどの場合には、1場面のみということもあった。国内日本人の調査では、対照国と関係する質問をすべて省いた形の調査票を用いたので、質問数も約半分となり、1回で5～6場面を調査した。

### ○回答の記録

調査時に調査者が回答やコメント類のメモをとると同時に、被調査者の許可を得て録音も行った。調査後、調査者のメモと録音の文字化を併せて、データベースに回答を入力した。外国人被調査者の回答入力に関しては、日本語に混じって母語でもコメントしている部分を訳したり、質問の通訳の正確さやそれに対する回答の適切さを確認するために、当該言語に堪能な調査者あるいは補助作業者が必ずチェックを行った。現在の段階では、回答はデータベース化された形で蓄積・保存されている(注5)。今後、データの整備を行った上で、全体を、あるいは部分的に磁気媒体の形で公開することを予定している。

## I.2.6. 設問について

本調査でとりあげた6つの場面に含まれる言語行動は、以下のとおりである。

場面1：人にぶつかった時（ぶつかられた側の抗議，ぶつかった側の謝罪）

場面2：職場でのお茶出し（お茶の出し方，出された側の感謝，感謝に対する応答）

場面3：家庭の食卓での小さな失敗（謝罪，言い訳／責任転嫁，家族への注意喚起）

場面4：パスポートの再発行依頼（依頼行動のくみため，ミスの謝罪，事情説明）

場面5：窓口での割込み（割込み，割込まれた側の反応，窓口の対応）

場面6：頼みごとへの返事（頼んだ側の用件のきりだし，頼まれた側の曖昧な返答）

### I.2.6.1. 設問のポイント

調査場面を選定し、調査票を作成する段階で、それぞれの言語行動場面についてどのような設問の方向性、あるいは分析の観点が可能かをチーム内で討議した。本報告書の第Ⅱ部では、場面ごとの分析担当者それぞれの関心・方針に応じて、その一部分をとり上げて、論じている。本節では、今後分析される予定の部分も含めて、各場面にあらわれる言語行動についての着目点、設問意図などを述べる。

### 【場面1】「廊下でぶつかる」

ビルの廊下といういわば公共のスペース（他の通行人はいあわせない）で、見知らぬ者どうしがぶつかった時、という設定である。ビデオでは、ぶつかった側が口をひらく前にぶつかられた側が注意（抗議）し、それに対してぶつかった側が謝る、という展開になっている。そこで、ぶつかられた側からの行動として起こり得る注意／文句／叱責に焦点をあてた質問、およびぶつかった側の謝る行動に焦点をあてた質問を、日本および対照国に関して設けた。また、他人と体が接触することについての感じ方（あるいは物理的な対人距離の感覚）の文化による異同も、併せて質問している。

なお、場面1をはじめとする複数の場面で、日本と対照国の比較の尺度として「丁寧／そっけない」「簡単・軽い／きちんとしている」などの表現を出した。文化によって、何をもって「丁寧」とするかなど、尺度自体が議論を含むことは認識していたが、あえて何らかの具体的な評価用語を提示することで、発生する議論やコメントの内容自体が言語行動意識に関する貴重な資料となると考えた。

### 【場面2】「お茶を出されて」

職場（事務所）で、接客中の同僚にお茶を出す場面である。単に仕事をしている同僚の机にお茶をもっていく場合と異なり、来客と話しているところであるので、来客という外部の第三者の存在、仕事の話の最中という要因を、行動においてどう考慮すべきものととらえるかという観点がある。また、お茶を出されて礼を言う同僚の側の行動についても、来客の存在、面談中という要因は、やはり関わってくる。それに加えて、ビデオの場面では、接客する女性社員のところに男性社員がお茶を運ぶという、やや特殊な設定になっており、特に会社のような場での男女の役割に対する意識も回答の随所で探ることができる。一連の質問の最後の部分では、職場でのお茶に関わる慣習一般、職場での女性と男性の役割、上司と部下の関係についての日外比較、自身の勤務先・学校などでの人間関係にまつわる経験などをきく質問も設けている。

### 【場面3】「ソースをこぼして」

家族で囲む食卓でのふるまいに関する場面である。体調が悪く、ぼんやりしていてうっかりソースをこぼした時の反応を題材に、まず質問する。次に、ソースをこぼした娘がいったんは詫びた後に母親に責任転嫁する様子をもとに、その行動の評価、そのような行動をする人物に対する評価、家庭内（親と成人した子の間）でのふるまい方、画面の家族から受ける印象、などについて考えを問う。それらの回答およびコメントから、家族の食卓での粗相が、当該社会のマナーやエチケットにてらしてどの程度の重み、意味合いをもつかについても、派生的に情報を得る。また、ビデオの場面が若い夫婦と妻の母との食事風景であることをもとに、異なる文化における家族のあり方についてもコメントを収集している。

### 【場面4】「パスポート再発行の依頼」

役所の窓口という事務的な場面での依頼をとりあげている。パスポートを紛失した社員が日の迫っている海外出張に間に合わせるべく、緊急の再発行を窓口の女性係員に頼む

というものである。そうした場合にどのように話をくみだして（どのようなことを言って、あるいは言わないで）依頼をするか、ということがまず質問の焦点となる。そして、ビデオの登場人物の発話から、「自分のミス（で紛失したこと）を謝る」「仕事の都合でどうしても必要だと説明する」という2つの出方をとりあげ、それぞれに関する自身の行動についての意識、現住国の人々の行動傾向や価値観についての観察、そうした行動をめぐる経験などについて質問している。また、事務的な場面でありながら、登場人物の会社員が非常にあせった様子で低姿勢に頼んでいることが動作や表情などからもうかがえるので、そのことについての着目、評価についても探る。

#### 【場面5】「割り込みの依頼」

上記の場面4に続いて起こる場面で、会社員の男性が緊急の再発行を頼んでいるところにもう一人の男性が「書類だけでも受付けてほしい」と割り込んでくる。この割り込むという行動、割り込まれた側の行動、窓口の係員の対応が、それぞれ質問でとりあげられる。ビデオでは、はじめに来ていた会社員は後の男性に譲る態度を示し、それを見た女性係員が順番なので待つようにと割り込んだ男性を断る、という展開になる。割り込みに対するそれぞれの立場からのそれぞれの対応に対して、被調査者の意識や評価、日本／対照国の行動傾向についての観察を問う。また、より一般的なレベルで、「順番を守る」ということに関わる規範や行動について、異文化比較を問う。

#### 【場面6】「依頼／回答留保～婉曲な断わり」

数日前に頼みごとをしておいた青年2人が中年男性の家に返事を聞きにくる、という場面である。居間に通されて挨拶もそこそこに用件をきりだすという青年の行動、それに対する中年男性の曖昧な応答態度が、質問のテーマとなっている。特に後者については、中年男性の思惑に対する推測と、人物としての印象が、ビデオ視聴の段階を追うごとにくり返し質問される。中年男性は、はっきり返事をせずにビールを勧め、単刀直入に聞かれても、まだ「イヤイヤ、マアネ」と立上がる。こうした曖昧な行動は、たとえば欧米人に比べた場合の一般的な日本的傾向ともいわれるが、そのことについて日本人、あるいは外国人はどのように反応するか、というのが関心の焦点である。質問の最後の部分では、頼みごとやその返事（およびその解釈）にまつわる異文化体験についても聞いている。

#### I.2.6.2. 質問のタイプ

今回のビデオ刺激による調査で行った質問は、以下のように大まかに分類される。場面ごとに、これらを取りまぜながら、被調査者の言語行動意識、異文化比較意識に関する回答を得た。

- ビデオ視聴前の一般的な言語行動についての質問
- 消音再生による提示をもとにした質問
- 音声付きの映像提示をもとにした質問
- 映像からさらに一般化したレベルでの質問

なお、ビデオによる場面提示は、どの場面についても、一気にはじめから終わりまでを

見せることはせず、いくつかの段階に分けて少しずつ提示した。そのようにしたのは、場合によっては、次の段階を予測させては先に進むという形をとるため、また場合によっては、視聴覚による情報量の多さを勘案し、被調査者が質問の対象となる言語行動の側面により集中できるような情報提示の仕方を心がけたためである。

以下に、質問のタイプごとの特徴や内容の概要を述べる。

#### I.2.6.2.1. ビデオ視聴前の一般的な言語行動意識についての質問

このタイプの質問においては、まだビデオの視聴を行わない段階で、ことばによる説明のみで場面設定を行った。ビデオを用いた場面提示よりも抽象的であり、個々の被調査者が思い浮べる状況内容（場所の雰囲気、相手、など）に差異が出る可能性はあるが、映像にあらわれる行動の印象に影響を受けないうちに、一般的な行動意識について情報を得ることを目的とした。ただし、このタイプの質問は場面1および2についてのみ行った。内容としては、自分ならその場面でどのように行動するかを尋ねている。質問の例を以下にあげる。

【例】

##### 1.0. 映像を見せずに

はじめに、まずビデオはお見せしないで一つお聞きします。

- 1.0.1. [日本・東京] で、たとえばビルの廊下を歩いていて、まったく見ず知らずの人とすれちがう時のことを思い浮べてください。ご自分（あなた）が急いでいたせいで、相手に体をちょっとだけですがぶつけてしまいました。

そんな時、ふつうどんな風に言葉をかけますか？ きまった身振りがありますか？ 表情は？

#### I.2.6.2.2. 消音再生による提示をもとにした質問

音声消してビデオを再生することによって、場面提示を視覚情報のみ限定しておいて、何がこれから起こるか／現在起こっているか、何がこれから発話されるか／現在発話されているか、などを推測させたり、登場人物の発話に影響されないうちに、特定場面における被調査者自身の言語行動を尋ねたりする場合に用いた。どのような推測を行うかだけでなく、視覚情報として与えられたさまざまな要素（登場人物の表情や動作、場面状況など）の中からどのようなものに注目し、どのような印象を形成し、判断を下したかということも探った。

【例】

(二人の登場人物がぶつかって、ぶつかられた側が何かを言う場面を消音再生で提示して)

- 1.1.1. この場面は、[日本・東京] での出来事です。この人（ぶつかられた人）はどんな内容の言葉を言ったと思いますか、簡単に説明してください。

#### I.2.6.2.3. 音声付きの映像提示をもとにした質問

音声を付けてビデオ映像を提示し、視覚・聴覚両方の情報をもとに、登場人物の行動についての印象や評価、同様の場面における自身の行動についての意識、現住国の人々の行動様式や価値観に対する推測や観察、あるいはそれに対する印象、母国との対比などを問う。刺激材料を映像で提示することで、発話内容だけでなく、パラ言語（イントネーション、間、発話の速度、口調、など）や非言語行動（表情、身振り、姿勢、など）の側面も話題にとりいれることを意図している。

【例】

（二人の登場人物がぶつかって、ぶつかられた側が「危ナイワネエ、気ヲツケテヨ」と言う場面を音声付きで提示して）

1.2.3. ぶつかられた（着物の方の）人のことをうかがいます。

SUB-1 この人の（相手の謝る前）の話し方について、どんな印象を受けましたか？

#### I.2.6.2.4. 映像からさらに一般化したレベルでの質問

このタイプの質問は、ビデオの場面よりさらに一般化し、「一般に会社で女性社員に男性社員がお茶を入れるということについて」「頼みごとを断わるときのやり方について」などのレベルで、母国と現住国の比較、自身の異文化体験などを問う。

【例】

1.3. この国と日本を比べて考えてみて下さい。

一般的にいて、通りすがりの人など他人の体と自分の体が触れるということについての受け止め方（感じ方）は、この国と日本とで違うと思いますか？ それともあまり違いませんか？

①あまり違わない ②日本の方が気にする ③この国の方が気にする

#### I.2.6.3. 回答のタイプ

回答の方式は、以下のようなタイプに分けられる。

- リストからの選択肢回答
- 調査票にある誘導肢に基づく回答
- 用紙への記入回答（今回の調査では1問のみ）
- 自由回答

ただし、いずれの回答方式であっても、被調査者が何らかのコメント（選択肢を選んだ理由、質問から想起した過去の体験やエピソード、など）を述べていれば、調査時の録音をもとにそれらもすべて回答データとして記録した。

以下に、調査票の設問[1.0.1.][1.0.1.S.]の部分为例に、リストからの選択肢回答と、誘導肢に基づく回答について、若干説明を加える。

【例】

1.0. 映像を見せずに

はじめに、まずビデオはお見せしないで一つお聞きします。

1.0.1. [日本・東京]で、たとえばビルの廊下を歩いていて、まったく見ず知らずの人とすれちがう時のことを思い浮べてください。ご自分(あなた)が急いでいたせいで、相手に体をちょっとだけですがぶつけてしまいました。

そんな時、ふつうどんな風に言葉をかけますか? きまった身振りはありますか? 表情は?

リスト ①

- ①とくに、何もしない。
- ②会釈するくらいで、言葉には出さないで謝る。
- ③「どうも」くらいの簡単な言葉で謝る。
- ④「すみません」「ごめんなさい」など、少し丁寧な言葉で謝る。
- ⑤その他 (睨みかえす、などは、この段階では問題外と考える)

SUB: 謝り方を選ぶとしたら、どんなことを気にして選ぶと思いますか?

その時の状況 (ぶつかり方 他 )  
相手 (相手の \_\_\_\_\_) 他 ( )

太い点線で囲んだ、「リスト」とされている部分は、被調査者が手元にもつ提示リストと共通である。ただし、「⑤その他」の後の二重下線部分のように、調査者への注意書きが調査票にのみ加えてある場合もある。「リスト」以外の部分にある項目は、被調査者には視覚的に提示されない。たとえば[1.0.1.S.]では、「どんなことを気にして選ぶと思いますか?」と質問して、被調査者から回答が得にくい場合などに、細い点線で囲んだ諸項目を調査者が誘導肢として口頭で提示した。

<注>

1. 本稿での「在日韓国人」は、韓国生まれで、留学や仕事などのため比較的最近日本に居住するようになった韓国人、いわゆるニューカマーの韓国人を指す。
2. 在外日本人、在日外国人の場合、都合が許す被調査者に対しては複数回の面接を行い、異なる場面を調査した。その場合は、同一の個人であっても、別個の被調査者IDを付与した。被調査者の異なり人数は896人（男性404人、女性492人）である。異なり人数による属性内訳については、図表Ⅲ-8-1～Ⅲ-8-4を参照されたい。
3. 日本語版、および各国語訳付きの選択肢リストの一覧は、新プロ国語研チーム(1999) pp. 147～307。
4. 面接における被調査者数の多少は、一長一短といえる。複数の場合、自分の意見で場をリードしてしまうような被調査者が中にいると、（特に日本人の場合）他の被調査者は遠慮してあまり積極的に回答しなくなることがある。その一方で、他の被調査者の発言に誘発された方が、活発にコメントが出る場合もある。個人の性格や組合せにもよるが、今回の調査では、緊張や遠慮によって回答が影響されるのを最小限に防ぐため、複数の被調査者で行う場合は必ず気おけない友人どうしなどの組合せとした。なお、調査人数の好みは出身国によっても多少異なるようである。今回の経験でいえば、フランス人は他に被調査者候補となる友人がいても、別個に調査されることを好む傾向がみられた。一方、ブラジル人は調査に友人や家族を誘ってくることも何度かあった。
5. 入力データの項目一覧、各項目の内容・入力方式、入力データ例については、新プロ国語研チーム(1999) pp. 359～363を参照されたい。

<引用文献>

新プロ「日本語」第2班 国立国語研究所チーム 1999 『ビデオ刺激による言語行動意識調査報告書 資料編』 文部省科学研究費（創成的基礎研究費）「国際社会における日本語についての総合的研究」報告書 非売品